

# 千客万来の社交都市・ロンドン 民活・地方分権(自治)で都市創生・活性化 (その1)

—寛容の精神と開放的な文化風土が多くの人々に活躍の舞台を提供、クリエイティブな都市へ—

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

## 1. ロンドンの歴史と地理

### (1) 歴史的沿革

#### ・古代 ロンディニウム

紀元少し前、カエサルに率いられローマ人がブリテンに入り、紀元 7 世紀頃からいるケルト人を追いやり、今日のロンドンにつながるロンディニウム(沼地のある砦)を占領支配する。ロンディニウムは、テムズ川河口より 80 kmほど入った潮の干満のある海港で、軍港・交易の中心として栄え、3世紀には人口3万人を数える。ローマ人は、この地で市域の周囲に壁を築き、外敵や野獣などの脅威から身を護った。

しかし、5世紀を迎えると、ローマ人は突如として本国に引き上げてしまう。代わりに入ってきたのは**アングロ・サクソン人**で、彼らはロンディニウムの僅か西にルンデンヴィックを築く。しかし、海賊(ヴァイキング)などから身を守る必要が生じ、市街壁を持つ東のロンディニウムに移動する。ロンディニウムの周りには森や田園が広がっていたが、門を閉めてしまえば安全というわけである。ロンディニウムとは、今でいう**ロンドン都心・シティ**(2.5km<sup>2</sup>)の部分指着している。この時期、このシティの部分だけが都市を形成していた。この頃のロンドンは、住民を護る市街壁に囲まれ**城塞都市**として存在していた。



イギリスの地形



ウエストミンスター

(国会議事堂、ビッグベン (時計塔))



1300年頃、シティ

#### ・中世 シティからロンドンへ

10世紀、イングランドにおいて貿易・軍事の面で最も重要な都市となったロンドンは、国内の統一により政治の面においても、その重要性が高まった。11世紀、王エドワードは、シティより少し上流に**ウエストミンスター寺院**を建設、ここに王宮を構え居住する。このあと**ノルマン人**、ウィリアム1世が征服王としてこの地に入り、1066年にホワイト・タワー (後のロンドン

「地方創生」支援プロジェクト



塔)をシティの南東に建設する。そして12世紀になると、それまで宮廷とともに移動していた中央政府の各機関が、ウェストミンスターに固定化される。しかし、国庫の機能だけは商業の街シティのロンドン塔に置かれた。このようにして12世紀から13世紀にかけ、ロンドンは首都となっていく。この時期、1200年のロンドンの人口は約4万人である。

中世期、ロンドンの中心市街シティには、数10のギルド(同業者組合で、今日の共済組合・労働組合的性格を持ち、後に社交クラブ的なものに発展する。)が結成され、それらの代表者によってシティは運営されていた。彼らの会館「ギルドハウス」は、市庁舎の役割を果たし、現在はシティの区役所となっている。シティは、イングランド最大の「商業都市」で、その経済力を背景に王権から独立、「自治都市」を形成していた。こうしてロンドンの人口は、1100年の約2万人、1200年の約4万人から1300年には約10万人に増加する。しかし、14世紀半ばにペスト(黒死病)が大流行し、人口は約3分の1に激減してしまう。

その後、ロンドンも次第に活況を呈し、人の往来が増えると1393年、市内には旅宿が看板を掲げ、「お酒を出す」ようになる。また1560年頃には定食食堂も開業する。この頃、食事はまだ一日二食だった。そして1564年になると、四輪馬車が登場、やがて辻馬車も現れ、17世紀に入るとロンドンと地方とを結ぶ駅馬車路線も成立、主要な道路を往来するようになる。

16世紀、イン(宿屋)の中庭にシアター(野外劇場)が設置され、演劇が上演される。1576年になると、東部の北ショアディッチに常設の劇場がつくられる。その後、テムズ川の南サザックに芝居小屋が並び、劇場街が形成されていく。この時期、シェイクスピアなど劇作家が出て、演劇の発展にしのぎを削る。

## (2)地理的特徴

ロンドンには、テムズ川の河畔に位置している。このテムズ川は、市内を蛇行する形でロンドンを南西部から東部に横切っている。河川から続くテムズ低地は河川の氾濫域で、その奥はなだらかな丘陵を形成している。南側は、地質が悪く、今日、鉄道の多くは地上に整備されている。

### ・気候

ロンドンには海洋性気候で、雨が多い都市とのイメージがあるが、実際の降水量は602mmで、ローマの875mm、パリの650mmに比べ少ない。冬はひんやりとし、郊外では11月から3月にかけて霜が2週間ほど降りる。また、降雪は、年に4-5回で、12月から2月にかけて発生する。冬の気温は-4°C以下や14°C以上になることは滅多にない。夏は、適度に温かく時折暑い。夏の平均気温は24°Cで、年に7日ほどは最高気温が30°Cを超えることがある。また、「霧の都」と呼ばれるように霧が発生することが多く、天気は1日の内でも変わりやすい。

「地方創生」支援プロジェクト



## 2. 近代社会の芽生え

### (1) 大航海時代(15世紀半ば～17世紀半ば) 交易ルートの確保

1453年のオスマントルコによるビザンチン帝国の攻略により、地中海沿岸からアジアにかけてイスラム文化圏が形成される。これに伴いキリスト教徒が多く住むヨーロッパ諸国は、陸路においてアジアへの道が塞がれるだけでなく、地中海の制海権も失う。

痩せた土地が続くヨーロッパ諸国は、こうした世界情勢の変化を受け、農業生産力の高い肥沃な土地が広がるアジアとの交易を求め、海洋に活路を求めることになる。そこで彼らは、宗教と科学とを分離、科学に対する宗教支配を解き、学術の発展や技術の開発に力を注ぎを削る。

即ち、西洋諸国は、天文学を発展させ地球が丸いこと、海の向こう水平線の奥に未知の大陸があること。また、星の動きなどから自身の位置を計測し、船舶の進路をコントロールする航海術(遠海航法)を開発する。さらに、造船技術を進歩させたり、海の隊商を護るため戦闘武器として鉄砲を開発するなどして、着々と海路でアジア、アフリカ等への進出を果たしていく。

こうして大航海時代の幕が切って落とされると、オスマントルコから遠い西欧を中心に、中世的秩序に対する諸改革が進み、近代社会を開くべく近世的な動きが広がる。当時、イギリスは最も西に位置する国で、「大西洋の向こうには大きな滝が口を開けて待っている」と信じられていた時代で、当時の船乗りたちは、赤道近くに南下すると、どんどん熱くなることから、「これ以上南下すると海は煮え立ち、船も人も燃え尽きてしまう」と危惧していた。その証拠にアフリカ沿岸の人達は、みな真っ黒な皮膚をしているとして、アフリカへの航海には尻込みしていた。

#### コラム「遠洋航海・歴史秘話」

大航海時代の始まりの頃は、まだ近海航法をとっており、常に陸地が見えるところを航海していたので、遠海航路をとり陸地から離れ見えなくなることを船乗りは大いに不安がった。しかし、近海航法も案外危険で、水深が浅く島や暗礁が沢山あり、座礁して沈没してしまう可能性があった。

この時代の15世紀、天文学が大いに発達、星の見え方から船の位置がわかるようになり、航海術が飛躍的に進歩する。北の位置を示す「羅針盤」は1380年に、また天体の位置を捉え緯度を示す器具も開発され、1478年には航海暦(天球上における天体の日々の位置を記したもの)が編纂される。そうして遠海航法が確立されると、船乗りたちはコンパスを見ながら遠く沖合を航海する方が、沿岸の水深を探りながら進むよりも、よほど早く目標に到達することを知る。

そして1488年、大西洋とインド洋とがつながっていることが、ポルトガルの航海士・ディアスによって発見されると、バエスコ・ダ・ガマは、1498年に喜望峰を回りインドのカルカットに到達する。カルカットには香辛料が溢れ、太守はすごく贅沢な暮らしをしていた。この太守に貿易を許され、ガマは香辛料を買い付けたが、商業税と港の使用料を請求され、はたと困った。しかし、これを踏み倒して帰

「地方創生」支援プロジェクト



国すると、持ち帰った香辛料は 60 倍もの価格で売れた。しかし、この遠海航路は命がけであった。170 名で出発したものの、無事に帰国できた者は僅か 44 名であった。それは新鮮な野菜や果物を食べられないため、ビタミン C 不足に陥り壊血病を発症したからである。

1502 年、ガマは二度目のインド航海に出る、この時は税や使用料の要求を撥ね付けるため、軍団に護られ 15 隻の大船団を組織し出航した。入港するにあたっては、沿岸で地元の船を焼き払ったり、街に大砲を撃ち込んだりして、相手を恫喝する形で入り香辛料等を手に入れた。

こうして西洋諸国の商人は、王の命令を受けるなどして、アフリカ、アジア、アメリカなど世界各地に進出、また、その進出の仕方も単なる交易船の派遣から、先兵となるキリスト教布教団の派遣や海軍との連携による進出など、次第に巧みになっていく。宣教師を送り布教を通じ受け入れへのアレルギーを解く、もし紛争になれば海軍を派遣し力づくで従わせる。そうして彼らは交易を拡大していった。

### ○世界最辺境の地、イギリス

肥沃なアジアの大地、その行く手に立ち塞がるオスマントルコ、こうした状況を打開するべくキリスト教国である東ローマ帝国(ビザンチン帝国)が、オスマントルコに陥落された 1453 年、英仏は百年戦争を終え、西欧諸国は**思想**(商業・交易を重視し、開拓者精神の下、進取の気質を尊ぶ)や**学術、技術**(安定した航海を成し遂げる術)、また**体制**(絶対王権からブルジョア主体の市民議会へ)を整え、海洋ルートでの交易に生きる道を模索する。まず、15 世紀後半、ポルトガルが先行、軍事力に優れるスペイン、商業的対応に勝るオランダが続き、イギリスが、その後を追った。

この頃、ヨーロッパでは、ネーデルランドを中心に重商主義が発展、資本主義の精神が発芽、宗教と政治の面で諸改革が進み、宗教と政治、教会と国家の間の役割分担を進め、社会は機能的な動きをとるようになる。農業社会の時代、土地が痩せ資源の少ない島国・イギリスは、農業生産とは異なる分野で稼ぐことが課題となっていた。そこで**イギリスは商業・交易に活路**を見だし、海外から原材料を安く輸入し売れる商品を加工・製造、国内外で捌くことにビジネスの主眼を置いた。17 世紀、イギリスは**ピューリタン革命**による王権の抑制、**名誉革命**(1688~89)による権利の章典の編纂などにより、**立憲君主制**を確立、**議会制民主主義**の下で地主や商工業者等の**資本家**(ブルジョアジー)が活躍できる舞台を整えていく。

プトレマイオス世界図



大航海時代以前の世界図



大航海時代の船団



17 世紀のグローブ座復元

「地方創生」支援プロジェクト



## ○宗教改革

16 世紀、西洋では社会の変化を受け、ルター、カルビンが出て宗教改革が起こる。そして中世権威として全てのものを宗教の下に置こうとするカトリック教会が、犯した罪を金銭の授受により解決しようと世俗化し腐敗すると、そこから分かれ**プロテスタント(新教)**が生まれる。彼らは、主観的な存在たる人間(聖職者)より客観性の高い聖書を上位に置き、科学等を宗教から解放する動きの中で布教活動に入る。

カトリック(旧教)は、保守的で伝統的、離婚したり利潤を得たりすることを忌避する。そこで**重商主義**の進展という社会変化をふまえ、現実的対応を取るプロテスタントへの改宗が広がり、社会は次第に古い慣習や制約を乗り越えていく。プロテスタントは、牧師も結婚もできるし、市民は離婚もできる、そして偶像崇拜をしない。このように宗教面での改革は、政治・経済・社会の各分野で**近代的な諸制度**を整える素地を提供していく。

## ○市民革命

14 世紀以降、平民の「地主層」と解放農地を所有する「独立自営農民」が、次第に力を持ち始めピューリタンとして、宗教面ではカトリックやイギリス国教会と、また政治面では絶対王政と、そして社会面では保守的な特権階級の大商人などと対立していく。

17 世紀初め、王権神授説を主張するジェームズ一世は、議会を無視し特権商人と結んで、ピューリタンを弾圧する。その息子チャールズ一世も専制政治を強化したため、議会は協議調整による意思決定をめざし 1628 年「**権利の請願**」を提出する。しかし、国王が貴族(大地主)・特権商人(大商人)と結んで、これを無視したため「ピューリタン革命」(1642 年)が起こる。中小商工業者に支持された議会指導者クロムウェルは、国王を処刑し「**共和制**」を始める。

その後、国王派と議会派とが妥協し、チャールズ 2 世が即位、しかし国王を継いだ弟のジェームズ 2 世もカトリックと絶対王政の復活をめざしたため、議会は、これを追放し新国王を擁立、1689 年に「**権利の章典**」を發布、立憲君主制を実現する(「名誉革命」)。その後、**責任内閣制**(内閣が議会に責任を負う。)を樹立し、王に代わって首相と内閣が行政を担当する。こうして「王は君臨すれども統治せず」ということで政党政治が始まる。そうして中小商工業者など新興ブルジョアジーが力を得て、商業や交易を重視した政策が推進されていく。

海外との商業・貿易活動(香辛料、綿花、毛織物・綿織物など)の拡大は、金融を介し資本主義が興る契機となる。西欧、特にオランダやイギリスなどは、宗教改革や政治改革を通じプロテスタントや議会が力を得て、**社会の近代化、産業化**の扉を開いていく。

※資本主義、生産手段を所有する資本家と、これに賃金の支払いにより雇われる労働者の関係の下に、物やサービスを生産供給する考え方、仕組み。

「地方創生」支援プロジェクト

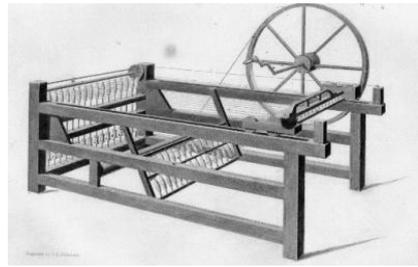




議会指導者クロムウェル



ロンドン大火



ジェニー紡織機

## (2) 近世ロンドン

イギリスは逐次、海洋進出を果たし、その活動領域を新世界へと拡大、テムズ川を行く船の数も増え、ロンドン港は北海における地位を高めると、都市ロンドンには国内外から多くの移住者が流入、市街の過密化が進み都市も広がっていった。この時期、ロンドンの人口は1500年の5万人から1600年には約20万人へと膨らんだ。しかし、河口に近いイースト・エンドには港湾労働者や移民など、比較的貧しい人々が定着、まちの治安が低下する。

1621年、都市人口の増大を背景に情報伝達、世論形成の手段としてロンドンで「新聞」が発行される。また、1652年にはイギリス文化を特徴づける、「コーヒーハウス」も登場する。この時期、人口も40万人を超え、世界の中心イスタンブールから持ち込まれたトルココーヒーは、大変エキゾチックで市民には魅力的に映った。早晚、コーヒーハウスは市民の社交の場となり、17世紀末には市内に2000～3000店も立地した。

この時代、コーヒーハウスは、情報や意見交換、そして世論形成の場としてだけでなく、あるものは政党支部としての役割も果たした。また、手紙の保管や本の貸出しを行うとともに、各種貴重品が持込まれ展示の場ともなった。そうこの時期のコーヒーハウスは、情報センター、郵便局、図書館、博物館、展示場などとしても機能した。

また、情報へのニーズの高まりと印刷技術の向上に伴い、フリート・ストリートには相次いで報道機関の立地が進んだ。この頃(1700年)、ロンドンの人口は約55万人に膨れあがる。

### ・ロンドン大火

しかし、商業・交易活動の拡大に伴い増大する人口に対し、十分な公衆衛生上の措置がとられなかったため、1665年にはペスト(黒死病)が大流行、当時の人口の15%にあたる7万人もの人々が亡くなってしまった。また、翌1666年には、シティのパン屋の失火に始まり4日間も市内が燃え続ける都市大火が発生。幸い前年のペストの流行で郊外等に避難していた者が多く、死者は22名と少なかったが、市内家屋の約85%(1万3千棟)が焼失してしまう。この大火で菌が死滅したのか、これ以降ペストの大流行はなくなる。

この時期まで、市内のほとんどの建物は木造で、石造は貿易商や職人組合の建物ぐらいであった。しかし、大火後は再建法により大規模な木造建物が禁止され、石と煉瓦による造りへと変わっていく。建築家ロバート・フックは、10年の歳月をかけロンドンの再建に入る。再建にあ

「地方創生」支援プロジェクト



たつては、**街路の拡幅**が計画され、広い、中位、狭いの三段階の街路規制がとられる。そして狭い街路には低い建物、広い街路には高い建物の建築が推奨される。これに合わせ街路の拡幅に向け、**土地収用のための土地価格査定を行う陪審制度**も導入される。また、シティから醸造業、染め物業、製糖業など、**火煙を発する産業**が追い出される。

こうした動きの中でメイフェアなど西部地域に、新しく市街が形成されていく。また、テムズ川に新たな橋が架橋され、南岸の開発も進む。東部では、ロンドン港がテムズ川下流のドックランズに向け拡張される。セント・ポール大聖堂も 1708 年に再建される。

15 世紀に大航海時代の幕が開くと、初めは、ポルトガル、スペインといったカトリック国が、海洋進出において優位に立っていたが、次第にプロテスタントのオランダ、イギリスが優位になっていく。それは先の国々が中世的体質を色濃く残し、保守的対応をとりがちなのに対し、後者の国々は時代の変化に鋭敏で、社会ニーズをいち早く感じ取ると、**ブルジョアジーと結び商業に価値**を見出し、**資本主義体制を整えて**いったからである。

イギリスは、1603 年、東インド会社を設立、アジアでの交易に本格的に乗り出すと、オランダの中継貿易を排除するべく、航海法を制定(1651 年)する。すると両国間で戦争が起こるが、海軍力に勝るイギリスがこれに勝利する。また、イギリスは未開国において植民地政策(帝国主義)を推進、各地で利権を広く獲得することで、割安な原材料を本国に入れ、これを用い加工・製造し商品として国内外の消費に回す。

その頃、イギリスでは、羊を飼って羊毛をとり、毛織物として輸出していた。しかし、海外から良質な綿花が入ってくると、これで綿糸をつくり布を織り綿織物として国内外に供給、すると商品が高品質でしかも安価であったため膨大な需要が発生、瞬く間に市場を席卷し膨大な利潤がもたらされる。なにしろインド綿花を用いた綿布は、柔らかくて、軽く、また暖かい。また、染めやすくプリントもしやすい。イギリスは、こうして得た富により経済的余裕ができると、その一部を研究開発に当て発明・発見を奨励していった。そうした流れの中で、技術革新が起こり、生産輸送手段などの機械化が進んでいった。

また、イギリスには、アメリカ、アフリカなどとの間の三国貿易を介し、海外から財宝や貴重な資源が続々と流れ込み、次第に富が富を生む状況を呈していた。イギリスは、そうして入植した土地から本国に移民を入れ、労働力として活用することで経済規模を拡大、そして大きくなった利潤をもって科学技術を発展させていくと、18 世紀後半に産業革命が起こる。

## ○産業革命

イギリスでは、市場の需要に応え綿布を効率的に大量生産するため、1733 年に横糸を簡単に通せる「**とびひ**」を発明する。すると今度は糸が不足し、紡績機械「**ジェニー紡績機**」が発明される。こうして綿工業の技術革新が順次進むと、機械材料をつくる製鉄業でも石炭を活用し技術革新が起こる。また、綿製品を工場から港へと運ぶ輸送手段として、1814 年にはスティーブ

「地方創生」支援プロジェクト



ンソンにより**蒸気機関車**が製造され、1825年の鉄道開通により実用化される。なお、蒸気機関自体は、ワットにより1710年に開発されていた。

土地が痩せたイギリスでは、工業化が国是であった。スペインは、植民地から略奪した富を本国に移し消費するのに対し、イギリスは植民地から原材料を持ち込み、国内で生産し商品として販売する力を有していた。18世紀後半の綿生産における手工業から機械工業への転換、蒸気機関の発明と石炭利用など、生産・エネルギー面などにおける一連の革新を「**産業革命**」という。

同じ頃、イギリスは、ノーフォーク農法(大麦→クローバー→小麦→かぶ、の四輪作。)を確立、穀物の生産性を高め余剰労働力を生み出した。これに伴い土地を追われた人々は、都市で工場生産に携わる賃金労働者となる。**プロレタリアートの出現**である(その数は100年間で3倍になる)。一方、地主層は工場経営者や商業者とともに、産業資本家(ブルジョアジー)として経済基盤を確立していく。こうして資本家と労働者という二大階層が出現、資本主義社会が形成されていった。商工業活動に従事する人々を支える、合理的な思想・精神、物の考え方は、プロテスタントの教義や科学技術の発展とあいまって、**産業革命成立の要件**の一つとなった。

イギリスでいち早く**産業革命が起こった要因**としては、①宗教改革による近代的で合理的な精神の涵養、②16世紀から続く重商主義による資本の集積、③市民革命による資本家の経済活動の自由の獲得、④海外覇権の確立による広大な市場の確保、⑤科学技術の発達、⑥鉄や石炭など工業資源の存在、⑦18世紀における農業面での革新による余剰労働力の創出、などがあげられる。

こうして島国で辺境の地のイギリスが、海軍力や造船技術を高め、**海洋国家として台頭**すると、スペインとの間で軋轢が生じ、トラファルガー沖での海戦に至るが、この戦い(1805年)においてイギリス艦隊はスペイン、フランスの連合艦隊を撃破。これによって制海権がスペインからイギリスへと移り、やがてイギリスが世界の7つの海に君臨することになる。

## ○市街の過密化

1663年に道路通行料金が法令され、**通行料金を財源に交通網の整備**が進められる。また、1760年代に入り産業革命が起こると、機関車や自動車が開発され、都市の交通手段も歩行や馬車から地下鉄、バスが主流となっていく。そうして商業・交易の中心として便利になったロンドンには、農村や外国から多くの人々の移住が進み、建築活動が活発化していく。

こうしてロンドンの人口が増加すると、市街は密集・拡大化の動きをみせる。しかし、街並み形成など建築に対する行政の介入を市民が嫌ったため、市域は無秩序に広がっていった。1700年頃のロンドンには、道は曲がりくねり、市内のアパートは4、5階建て、3部屋しかない住宅に30人ほどが暮らす状況もみられた。

そんな状況下にあった18世紀、その初頭に55万人だった人口は、末には86万人を数えるほどになる。この時期、金持ち・上流階級は、ハイパーク周辺に街区開発された、落ち着いた雰囲気のある住宅地・ウエスト・エンド(レスター、ラッセル、ハノーバラーなど)に居を構えた。また、

「地方創生」支援プロジェクト



港湾労働者や移民(ユグノー、ユダヤ、アイルランド人など)など貧しい人々は、イースト・エンドに住むなどして、市民の住み分けが進んだ。

#### ・衛生環境の悪化

この時期、下水道はまだ整備されておらず、汚物はおまるに入れ道路中央にとられた排水溝に捨てられていた。しかし、上階に住む者は、いちいち下に降りていくのが面倒で、窓を開け道路に向け汚物をまいていた。そうした道路を、この時代の人々は歩いていた。そこで歩行者は自衛のため、大きな傘をさし、つばの広い帽子や山高帽を被り、外套を羽織り高い靴(ハイヒール)を履いた。この排水溝の水は最終的にはテムズ川へと流れ込み、人口が増大していくと自然の希釈では限界に達し、**水質汚濁**などの公害現象を呈するようになる。

河川の水質汚濁や悪臭はひどく、上水の塩素殺菌が行われていない時代(塩素殺菌は1905年から)、チフス、コレラ(インドからもたらされたと推定されている。)などの**伝染病**が頻繁に発生した、そして抵抗力の弱い子供の4人に3人は、5歳未満で亡くなっていた。1848年と1854年にはコレラが大流行し、多くの死者が出た。そのため1885年に下水道整備がスタートするが、本格化するのは第二次世界大戦後を待たねばならなかった。

(その2に続く)

#### 参考資料

歴史上の推定都市人口:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドン:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

小池滋:世界の都市の物語ロンドン,(株)文芸春秋社,1992

小池滋:世界の歴史と文化「イギリス」,(株)新潮社,1992

小林章夫:ロンドン都市物語,(株)河出書房新社,199

見市雅俊:講談社選書メチエ「ロンドン 炎が生んだ世界都市」,(株)講談社,1999

小林章夫:ロンドンシティ物語,(株)東洋経済新報社,2000

ロンドン駐在員事務所:ロンドンの都市競争力戦略-混雑税の導入を通して-,日本政策投資銀行,2005

編:ケン・リビングストン訳:ロンドンプラン研究会「ロンドンプラン-グレーター・ロンドンの空間開発戦略-」,都市出版(株),2005

岡村祐:英国ロンドンにおける眺望景観保全施策の新展開,日本建築学会大会学術講演梗概集 pp855-856,2008

渡邊研司:図説「ロンドン 都市と建築の歴史」,河出書房新社,2009

近藤和彦:岩波新書 1464「イギリス史 10 講」,(株)岩波書店,2013

名古屋都市センター:眺望景観の保全施策,平成 26 年度 NUC レポート No.018,名古屋都市センター,2015

指昭博:図説「イギリスの歴史」,河出書房新社,2015

「地方創生」支援プロジェクト



## 掲載写真等

イギリスの地形 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ウェストミンスター宮殿 [https://ja.wikipedia.org/wiki](https://ja.wikipedia.org/wiki/)

1300年頃、シティ <https://upload.wikimedia.org/wikipedia>

大航海時代以前の世界図 <http://www.script1.sakura.ne.jp/>

議会指導者クロムウェル <http://manapedia.jp/>

ジェニー紡織機 <http://tamatanikki.sblo.jp/>

大航海時代の船団 <http://blogs.yahoo.co.jp/>

17世紀のグローブ座復元 <http://www.japanjournals.com/>

ロンドン大火 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

19世紀ロンドンの市街地の拡大 ヒュー・クラウト編「ロンドン歴史地図」 <http://www.ichiura.co.jp/>

近世風の街並み(道の中央に排水溝) <http://media-cdn.tripadvisor.com/>

大ロンドン計画 <http://toshi1.civil.saga-u.ac.jp/>

ハイドパーク <http://smartrip.jp/> <http://taptrip.jp/>

アスコット競馬場 <http://mobell.hatenablog.com/>

ロンドン地下鉄網図 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドン地下鉄・チューブ <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ピカデリーサーカス <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/>

近世イギリス、コーヒーハウス <http://yamatake19.exblog.jp/>

ビートルズ <https://www.bing.com/>

ウィンブルドンテニスコート <http://image.search.yahoo.co.jp/>

ドックランズ、カナリーワーフ <http://london.navi.com/>

大ロンドン、土地利用と高速道路網図 <http://blog.goo.ne.jp/>

ロンドン混雑税・課金区域 <http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/>

ミレニアム・ビレッジ 小学校&コミュニティセンター

<https://www.machinami.or.jp/>

共同住宅 <http://kinoie-saijou.seesaa.net/>

シティ・オブ・ロンドンの景観 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドンの眺望景観の規制 City of Westminster 1994

「地方創生」支援プロジェクト

